

教科書の基本例文を活用したコミュニケーション活動の工夫
英語表現力の向上を目指して

〇〇〇立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇

1 はじめに

英語を聞き取り少しでも話せるようになりたい、と本校のほとんどの生徒が願っている。現行の学習指導要領になって、さらに生徒の実践的コミュニケーション能力向上のために、授業を工夫することが求められるようになった。このような状況で、本研究では、コミュニケーション活動に必要な基礎的な表現力を身につけながら学習し、英語を使うことの楽しみを見出し、達成感を持つことができる授業作りの工夫に取り組んでみたい。

2 主題設定の理由

高校生が英語を使えるようにするには、第一に、英語を話すことに前向きな姿勢を持たせることが必要だと考える。私がふだん接している生徒達は、概して、自分が間違っただけを発言することに臆病である。それは英語の授業のみならず、他教科でも同じ傾向にあるようだ。

そこで、トピックに応じた基本例文を、段階的に指導しながら定着させることを通して徐々に英語の表現力をつけていく授業を工夫すれば、そうした傾向を抑えることができるのではないかと考えた。インプットなしにアウトプットはあり得ない、とも考えられることから、まずは、初歩的な英文をできる限り定着させ、次に、自分自身の力でそれらを応用した英文を作って、相手と使用場面に応じたコミュニケーションができるようになることを目指したい。

また、身近な話題を通して英語を使う楽しみを実感できるコミュニケーション活動を授業に取り入れれば、生徒の学習意欲が向上し、自主的な学習態度を育てることができると考える。

3 研究内容

(1) コミュニケーション活動によって基本例文を定着させる授業

- ア 基本例文の作成
- イ 基本例文を用いた言語活動

(2) ペア・ワークを活性化させるためのALTの活用

- ア ペア・ワークの目的
- イ ペア・ワークにおけるALTの役割
- ウ コミュニケーション方略の活用

(3) インタビュー・テストによる評価

- ア インタビュー・テストの必要性
- イ インタビュー・テストにおける評価の観点
- ウ インタビュー・テストの方法

4 研究計画

(1) 対象生徒・指導科目

年度	対象生徒	科目	単位数	使用教科書
平成18年度	2年英語コース	異文化理解	2	DAILY ENGLISH COURSE (池田書店)

平成19年度	3年文系クラス	選択英語	2	Orbit English Reading (三省堂)
	3年理系クラス	選択英語	2	
	3年英語コース	総合英語	3	

英語コース「総合英語」：3単位中の1単位で実施した。

「選択英語」：必ずしも英語の得意な生徒が選択するわけではない。

(2) 指導計画

平成18年度	現状分析，ペア・ワークを中心とした授業の試行			
平成19年度	文系クラス (11名)	理系クラス (13名)	英語コース (36名)	テスト
4月				プリ・テスト
4月～11月	基本例文とペア・ワークを中心とした授業 週2時間 週1時間			5月：インタビュー・テスト (1回目)
				7月：インタビュー・テスト (2回目)
				11月：インタビュー・テスト (3回目)
11月				ポスト・テスト

(3) 評価

ア インタビュー・テスト

(ア) インタビュー・テストの必要性

スピーキング能力を評価するのに使用する。最近では、T-SST(Telephone-Standard Speaking Test, アルク)、TOEIC LPI(Language Proficiency Interview)、STEP BULATS(日本英語検定協会)、「国連英検インタビュー・テスト」など様々なインタビュー・テストが行われており、スピーキング能力の評価をする必要性が広く認識されている。筆記試験だけでは、英語によるコミュニケーション能力を十分には測定できない。TOEIC 高得点者でも適切な英語によるコミュニケーションができない、という事例も指摘されている。したがって、最近では、多くの企業のみならず、大学(早稲田大学、多摩大学、京都大学など)においても、インタビュー・テストが取り入れられている。本研究でも、生徒の実践的コミュニケーション能力を評価するために必要な方法として実施する。

(イ) 評価方法

3ヶ月に1回、ALTによる3分前後のインタビュー・テストを行う。日本人教師とALTがそれぞれ評価した後、両者で検討し、最終的な評価を行う。

a 目的とレベル

	インタビュー・テストの目的	レベル
1回目	意欲的に英語を学ぶ動機付けとする	生徒の8割が合格する
2回目	コミュニケーション活動の楽しさを	質問をやや多くし、コミュニケーション
3回目	実感できるようにする	方略を用いさせる

b テストの意味

1回目は、生徒の8割が合格するようなテストにする。なぜなら、インタビュー・テストは、生徒を評価するためだけに行うのではなく、生徒に、これからも意欲的に英語を学んでいこうとする動機づけを行うものだからである。特に、スピーキング・

テストの場合、これに慣れていない生徒は、A L Tとの1対1の会話で不必要に緊張する。また、筆記試験と違って目の前で結果がわかるので、失敗するとすぐに委縮してしまって、次回のインタビュー・テストに拒絶反応を示す可能性もある。したがって、リラックスした雰囲気、英語でコミュニケーションするのは楽しいということを経験させて、意欲と期待を持続させることが、非常に大切なポイントとなる。

2, 3回目も、生徒が英語のコミュニケーション活動の楽しさを実感できるようにする。同時に、実践的なコミュニケーション活動となるよう、できるだけ即興的に対応しなければならない質問の数を増やす。さらに、コミュニケーション方略を意識的に使って、積極的な態度で会話を継続したり修復したりできるようにする。

c 評価の観点

実際の評価については、次のような視点で評価する。

- (a) 基本例文を身につけたか。
- (b) 積極的にコミュニケーションしようとする態度が向上したか。
- (c) コミュニケーション方略 (Communication Strategy) を有効に使えたか。

イ リスニング力の評価

日本人教師がA L Tの協力を得て本研究のために作成したリスニングテスト(100点満点)を、プリ・テストとポスト・テストとして使用する。形式は、絵や写真の説明を聞き取る形式のもの、問いかけに対する適切な応答や対話を完成させる文を聞き取る形式のものとする。コミュニケーション活動においては、リスニングが50%近くを占めるとも言われている。ペア・ワーク、ペアによる発表、A L Tとの即興的なコミュニケーション、インタビュー・テストなど、自分の身近なことについてのインタラクティブな言語活動を通して、どのくらいリスニング力が向上したかを評価する。

ウ 自己評価と他者評価

- (ア) 自己評価を行うことで、自分の行った言語活動を、自分で評価しながら達成感を味わうことができるとともに、授業や家庭における自律的な学習につながる効果が期待できるものとする。先行研究でも、英語の学習は、学校の学習時間だけでは決定的に不足することが示されている(竹蓋他, 2001など)。家庭で自律した学習活動がなされないならば、実践的なコミュニケーション能力は身につかない。
- (イ) 本研究の目的の一つは、コアになる基本例文を身につけ、実際に教室などで使いながら定着させるとともに、教室を離れても自主的な学習態度を身につけさせ、英語学習の継続的な動機を高めていくことである。
- (ウ) 他者評価は、他の学習者を評価することで全体の中での自分の位置を知ることができると同時に、学習者が自分の学習を客観的に振り返る視点をもつことにもつながり、次の学習や言語活動にどう取り組むべきかに関する「気づき」をうながす効果があるものと思われる。

(エ) 自己評価表

できるだけ多くの単語を使って発表した。	(4 3 2 1)
わかりやすく説明するよう工夫した。	(4 3 2 1)
メモを見ないで発表するよう努力した。	(4 3 2 1)
大きな声で、はっきりと話すことができた。	(4 3 2 1)
活動の中で気づいたこと、考えたこと。	

(オ) 他者評価表

発表者の声ははっきりと聞こえましたか？	(4 3 2 1)
発表者の例文の内容は理解できましたか？	(4 3 2 1)
発表者へのコメント。	

5 研究実践

(1) コミュニケーション活動によって基本例文を定着させる授業

ア 基本例文の作成

全員が使用している教科書 Orbit English Reading (三省堂) の各レッスンから、日本人教師が生徒に身につけさせたい表現 10 ~ 15 を選択する。これをもとに、日本人教師と ALT が検討と議論を重ねて、基本例文を作成する。

(ア) 表現の選択基準

- a 実際のコミュニケーション手段として英語を学ぶ上での重要性、難易度、使用頻度などを判断して選択する。この場合、生徒の学習到達度や興味の範囲などを十分に考慮して選択する。生徒が、自分の身近な話題で有用性を感じ、すぐ興味を持てるとともに、英語でも日本語でも集中力を発揮できるようなものが最適である。
- b 実際の言語使用場面や日常生活に役立つ英文が学習できるようにする。
- c 生徒がコミュニケーション方略の使い方について学習できるような基本例文を作成する。

(イ) 基本例文作成の実際

- a 元になる表現を教科書から選択して、抜き出す。

Everyone knows that babies don't play sports!

- b 次に、これを使った例文をいくつか考える。

Everyone knows that cats can't drive cars.

Everyone knows that insects are not tasty.

- c 生徒が理解しやすい例文をいくつか提示しながら、ペアによるプレゼンテーションをしやすい会話文を作る。

(ウ) 基本例文の例

3 be disappointed

A: When and why were you disappointed?

B: I was disappointed when I lost my cellular phone yesterday.

16 survive

A: What happened to your grandfather?

B: He had a serious operation. I was very worried.

A: Did he survive?

B: Yes, he did, so I'm very happy about that.

21 worried

A: Ah! The exams are so difficult. Are you worried about it?

B: Yes, I am, maybe I can't pass them.

30 as quickly as possible

A: Do you always go home as quickly as possible after school?

B: No. I usually have Tea Ceremony club.

イ 基本例文を用いた言語活動

(ア) 言語活動の流れ

<ペア・ワーク 英作文 プレゼンテーション インタビュー・テスト>

(イ) 言語活動の手順

- a ペア・ワークによって基本例文のロール・プレーイングを行い、生徒の言語活動の機会を多くする。何度か繰り返したり、役割を交換したりしながら、重要な表現に慣れさせる。

- b 次に、ペア・ワークで練習した表現を使って、自分に身近なことについて英語で表現（ライティング）させる。
- c 各自が書いた英語の文を、ペアやクラスでプレゼンテーションさせる。
- d この時、ALTからの質問を受けるなどのコミュニケーション活動を行うとともに、ALTからのコメントなどによるフィードバックを受ける。
- e インタビュー・テストを行い、コアとなる基本例文を通して学習した表現が身についているかどうかを確認する。
- f また、ここでは、生徒がすでに習ったことや知識を総合的に使いながら対応するような即興的な会話に対応することを求める。この時、コミュニケーション方略を用いてALTとのコミュニケーション活動を続けるように努めるなど、生徒の言語活動の機会をできるだけ多くする。
- g ALTとのコミュニケーション活動、ペア・ワークによる言語活動、インタビュー・テストなどにより、実践的なコミュニケーション能力の土台作りを行う。

（２） ペア・ワークを活性化させるためのALTの活用

ア ペア・ワークの目的

ペア・ワークを通して、生徒がお互いに学び合い、助け合うことにより、コミュニケーションに必要な共感的な関係を作れるようにする。これは、「間違っただけを言って恥ずかしい」というような、言語活動をする上での障壁をできるだけ小さくすることを目的とする。

また、ペア・ワークによって、英語でインタラクティブに意思を伝達したり発表したりするコミュニケーション活動の機会をできるだけ多く経験させることも、目的のひとつである。

イ ペア・ワークにおけるALTの役割

ペア・ワークは、生徒の語彙力の問題などもあり、パターン化された練習になりがちである。そのままの状態だと、自然で発展的な会話に発展していくのは難しく、実践的なコミュニケーションの場でせっかく習った表現をうまく使えない可能性もある。

ALTの文化的な背景や発想の違いなどのコミュニケーション・ギャップにより、生徒は異文化を知ったり、刺激されたりしながら英語を学ぶことで、驚いたり、楽しんだりしながら、英語によるコミュニケーションを体験することになる。こうした日本人教師だけでは経験させてあげることのできない学習環境を通して、生徒は、自然な英語による会話を身につけていくようになると考える。

また、とかく典型的な会話のパターン練習になりがちなペア・ワークの練習が、ALTの当意即妙な質問などにより、自然で発展的な会話となることや会話を継続させるためのコミュニケーション方略などの必要性に自然に気付いていくことになる効果も期待できる。

つまり、ALTは、基本例文を定着させるだけでなく、ALTとの即興的な会話を通して、生徒の異文化理解を助けるとともに、自然な会話を身につける機会を提供してくれるのである。ALTはペア・ワークにおいて重要な役割を担っているのである。

ウ コミュニケーション方略の活用

（ア） コミュニケーション方略の意味

実際のコミュニケーション活動では、いつもスムーズに会話が進んでいくことはまれである。「コミュニケーション方略」とは、コミュニケーションにおける挫折を修復する言語的及びジェスチャーなどを含む非言語的方略である。しかも、「母語を習得する幼児や、第二言語／外国語を学習している者が、学習している言語によって自分の意思や考えを伝えたいのに、文法力や語彙力が不足しているためにうまく自分の意思を伝達できないようなとき、不足している伝達能力を補うために、意識的かつ意図的に用いる方略または手段の総称」（白畑智彦他，1999）でもある。

学習指導要領にも「繰り返しを求めたり，言い換えたりするときに必要な表現を活用すること」と指摘されている。これには，「話題の転換」「反復の要請」「発話の明確化とその養成」「発話準備のための時間の確保・発話の躊躇」などの言語機能が含まれ，さらに，場合によっては，言語を使わずにジェスチャーなどを使って相手から助けや協力を求めるなどの方法もある。

「コミュニケーション方略」は，積極的なコミュニケーション活動において極めて重要であり，その意義を正しく認識して積極的に活用すべきものである。本研究では，生徒の積極的なコミュニケーション活動を促すため，このことに意識的に取り組んでいきたい。

(イ) コミュニケーション方略の機能の分類

コミュニケーション方略の機能	表現例
a 自分の意見を言う	In my opinion, ~
b 相手の意見を聞く	How about you? What do you think about this?
c 話題を転換する	By the way, ~ Speaking of ~ Listen, ~
d 相手の意見を認めつつ，自分の意見を言う	I agree with your opinion to some extent, but ~ Yes, but ~ I see, but ~ That's a good point, but ~ I understand that ~, but ~
e さらに説明を求めたり，要約・引用をする	I have a question about ~ Can I ask you about ~ ? What do you mean by that? Will you explain your idea in detail? According to ~ , In brief, ~ As you said, ~

6 指導事例

(1) コミュニケーション活動によって基本例文を定着させる授業

ア 基本例文の提示

< 4月の例 >

A : Are you often happy when you receive e-mail?

B : Yes, it is always exciting.

A: By the way, how often do you mail in a day?

B: It depends.

A: Can you tap the key board very fast?

B: Yes, I can. E-mail is a must today.

“by the way” は，コミュニケーション方略上も重要な表現である。使用頻度が高く，会話をスムーズに行うために，相手の反応を見て話題を変える必要がある。

< 9 月の例 >

A: Have you ever been to England?
B: Yes, I have.
A: What did you eat in England
B: I ate Fish and Chips, I hated it, but to be polite, I <u>pretend to</u> like it.
A: Well-done.

9 月になると，A L T が教室に入り，基本例文を提示する前から自然なコミュニケーション活動が行われ，基本例文の提示がスムーズになっていた。

イ ペア・ワーク活動

(ア) 授業の手順

a 生徒への基本例文の提示は，プリントを配布するとともに，黒板に板書する。A L T は，他の例を挙げたり，ジェスチャーを使ったりしながら読んで解説する。おおまかな意味の確認をする。	5 分
b コーラス・リーディング ペア・ワーク	1 0 分
c 提示されたトピックで，オリジナルの文章を 2 文以上作る。A L T に聞いたり，教室の和英辞典を使ったりする。英語での質問には答える。	1 0 ~ 1 5 分
d 生徒の作った文章を発表させる。その際，棒読みではなく，受け手を意識して伝えさせるようにする。声の大きさ，アイコンタクトなどにも充分注意させる。	1 0 分
e A L T のコメント 基本的に批判はせず，ほめる。また，時間内にできなかったグループは励ます。どこが良かったか，どのペアが良かったかなどのコメントをしたり，場合によってはより良い言い回しを紹介したりする。	5 分
f 自己評価表，他者評価表の記入をする。他者評価表は，発表したペアに渡して評価をフィードバックする。自己評価表は，日本人教師が必要に応じて適切なコメントをする。	5 分
g 次回の授業で基本例文の定着度を確認するとともに，A L T との短い会話で復習をする。	

(イ) 実際の授業展開

授業の回数	1 学期 15 回，2 学期 15 回（毎回ペア・ワーク実施）を実施した。
机の配置	文系，理系クラスでは，コミュニケーションの取りやすさを考えて，生徒の机を半円形に配置した。
生徒の座席	当初は授業の前にくじ引きで，やがて，自由にペアを交換させた。

(ウ) 評価

< 4 月 >	<ul style="list-style-type: none"> 既習表現にも関わらず，ほとんど定着していない。 くじを引いてのペア活動に戸惑いを感じる生徒がいた。
< 9 月 >	<ul style="list-style-type: none"> 語彙説明の前に単語の意味を理解している。リーディングの際に，単語や重要表現を意識的に身につけるように心がけている。 授業を重ねる毎に，コミュニケーションが取れるようになり，恥ずかしがらずに英語を話すようになった。

ウ プレゼンテーション

(ア) 生徒の発表(10分)

生徒はペアになって、他の生徒が注視する中で発表する。

< 4月の生徒の発表例 >

A: Today, we can go to a restaurant.
B: By the way, what do you want to eat?
C: I want to eat hamburgers.

自信のなさからどうしても小さい声になりがちであるが、受け手に聞こえるように発表するよう繰り返し指導した。

< 9月の生徒の発表例 >

Now, listen! We want to start our presentation. OK?
A: Are you busy now?
B: Yes, I am.
A: Oh, really? Maybe, you pretend to be reading the newspaper.
B: Yes, sorry.
Thank you for your kind attention!

最初に注目を集める表現、最後に感謝の言葉を入れるなど、かなりプレゼンテーションらしくなってきた。また、ジェスチャーや感情移入が見られた。

受け手を意識して、面白いと感じてもらえるようなものを作ろうと意識し始めた。相手の反応を見て積極的にコミュニケーションする姿勢が見受けられた。

受け手に理解してもらえる大きな声とアイコンタクトの大切さも確認させた。

(イ) A L T のコメント(5分)

A L T がなるべく短い言葉で簡単にコメント。より良い言い回しの紹介などをした。

(ウ) 自己評価表、他者評価表への記入(5分)

< 4月 >	最初は、他人の評価をするなど思いもよらず、戸惑う生徒がほとんどだった。
< 9月 >	自分が一生懸命やっている分、他者評価も、良い方向でお互いを刺激しあうことができた。

(2) ペア・ワークを活性化させるための A L T の活用

ア A L T によるペア・ワークの活性化

A L T は、ペア・ワーク中にペア・ワーク活動をしている生徒の机間を回って、学習している表現を使ったコミュニケーション活動に生徒を参加させた。

A L T : How often do you work part-time? (* 下線部は学習した表現)
Student: Three times a week.
A L T : By the way, what kind of job do you do?
Student: I work in a convenience store.

ペア・ワークが単なるパターン・プラクティスにならないように、生徒の身近な話題について、A L T が即興的な会話を積極的に行った。その際、A L T は、今までの授業ですでに学習した表現や単語を意識的に使って、生徒がスムーズにコミュニケーションに入れるようにした。

その間に、日本人教師も英語で話しかけ、A L T の説明でわからなかったことに対する質問に答えるなどして、ペア・ワークが軌道に乗るように手助けした。

プレゼンテーションの英文を作るときには、生徒からALTに対して、意味の似た単語や熟語の用法の違いや使用場面などについて、次のように積極的に質問する姿勢が見られた。

Student: Can I use “two or three books”?

ALT: Yes, you can. But we often use “a few books.” In my opinion, the usage of “a few books” is sixty percent.

イ ALTによるプレゼンテーションへのコメント

ALTのコメントは短く適切なものであった。特に、プレゼンテーション直後の即座のフィードバックなので、生徒にとっては緊張感があり、しかも、うまく言ったとほめられたときは、達成感や自信を得ることができた。

Well-done! You could change the topic by using “by the way.” (4月の例)

“Pretend” is a little bit difficult for you to use, but you use it perfectly. (9月の例)

Your topic is very interesting.

Your sentence structure is good.

In English, we have another expression.

Your eye contact is excellent.

(3) インタビュー・テストによる評価

ア インタビュー・テストの実施内容

5月、7月、11月に、一人3～4分でALTとのインタビュー・テストを実施した。

(ア) <1回目・5月初旬>

a インタビュー・テストの方針、生徒への指示

生徒にかなりの緊張が見られたので、英語を話す雰囲気を出すために、warm-upとして、簡単な挨拶や会話から始める。

「英語を使ってコミュニケーションする」ことが大事なので、あらかじめ10問の質問事項を生徒に示しておいた。また、インタビューを始める前にペアで質問をしあい、答えてみるようにアドバイスした。

b 1回目の質問文

Do you like our school?

What is your favorite subject?

How many subjects do you study?

Do you belong to any clubs? What clubs?

What time do you arrive at school in the morning?

What time do you leave school in the evening?

How much homework do you have every day?

基本例文で取り上げた重要表現7つをすべて聞いた。ただし、生徒の身近な話題で、新たなコンテキストでの内容にした。

(イ) <2回目・7月初旬>

a インタビュー・テストの方針、生徒への指示

英語を話すことに慣れてきて、それほどの緊張は見られなかった。インタビュー・テストに入る前に、生徒からの質問を許可した。

それまでの授業で学習した重要表現を中心に出题すると、前の授業で予告した。

授業で使ったハンドアウトをもとに、時間を見つけてペアになって練習しておくようにアドバイスしておいた。

b 2 回目の質問文

Have you ever traveled abroad?
Where did you go?
Did you enjoy it ? What did you do there?
When were you disappointed recently?
What is your favorite restaurant?
How much do you usually spend at the restaurant?
Do you sometimes make spelling mistakes?
Have you ever pretended to like the food that you don't like?

・ コアとなる基本例文で取り上げた重要表現をすべて聞いた。ただし、生徒の身近な話題を取り上げ、新たなコンテキストでの内容にした。

(ウ) < 3 回目・11 月初旬 >

a インタビュー・テストの方針、生徒への指示

3 回目の最終テストとして、今までに習ったものを織り交ぜて出題した。英語を話す意欲の高い生徒に対しては、前回よりもテストを始める導入の部分を多くして、自由度を高めて warm-up させた。

できる限り、文章にして応答させるよう指示した。Yes/ No だけで答えた場合は、言い直しをさせた。

b 3 回目の質問文

How often do you go to the library?
How do you come to school?
How long is your journey to school?
Do you like to eat insects?
Have you ever been abroad?
What countries have you visited?
What country would you like to visit?
Does your class at school have good behavior?
Are you always well behaved?
Is Kotehashi High School in the southern part of Chiba prefecture?

イ インタビュー・テストの評価

(ア) < 1 回目・5 月初旬 > 緊張 + Yes, No しか言えない

- ・ 緊張の度合いが高く、質問事項の内容がわかっているのに答えられない生徒が何人かいた。応答ができない生徒には、少し時間を与えた。それでも答えられないときは、日本人教師がヒントを与えたり、簡単な表現に置き換えたりした。
- ・ 日本人教師を何度もふりむき、A L T とアイコンタクトできない生徒が多かった。
- ・ Yes, No 以外の単語を発しない生徒が何人かいたが、あきらめずに会話をつづけ、コミュニケーション方略 (What does it mean? Pardon ? など) を使うよう指示した。

(イ) < 2 回目・7 月初旬 > リラックス + 「コミュニケーション方略」

- ・ 1 回目に比べると、生徒はリラックスした様子で、笑顔も多く見られた。
- ・ ハンドアウトなしのテストだったため、質問内容がわからない生徒が半分近くいた。
- ・ 大半の生徒が、コミュニケーション方略を使いながら A L T との会話をつづけようと一生懸命だった。特に、最後の“pretend to ~”は抽象度が高く、わかりにくかったようである。コミュニケーション方略を使って「わからない」ことをジェスチャーで示したり、A L T の顔を見つめたり、戸惑う生徒もいた。日本人教師が “Please ask him

a question.”，“How can you continue your conversation?”などと言って，コミュニケーション方略を使って会話を継続できるようにサポートをした。

(ウ) <3回目・11月初旬> **積極的なコミュニケーション活動**

- ・ 今まで学習してきた例文を復習して意欲的にテストに臨んだ生徒は，ALTの質問に的確に答えることができた。
- ・ 英語を話すことに苦手意識を持っている生徒については，1回目，2回目に比べ，どれだけ上達したかに観点を置いた。いつまでも黙っている生徒は，全くいなかった。

7 考察

(1) リスニングテストについて

表1 プリ・テストとポスト・テストの得点率(%)

	プリ・テスト	ポスト・テスト	上昇度
文系クラス(11名)	41.3	55.8	+14.5
理系クラス(12名)	49.3	57.2	+9.9
英語コース(36名)	53.8	59.0	+5.2

文系クラス，理系クラス，英語コースともリスニング力の向上が見られた。特に，文系クラスの上昇度が大きく，理系クラスでもかなりの上昇が見られた。

プリ・テストと比較して10%以上上昇した生徒 名(37%)〔文系 名，理系 名，英語クラス 名〕について，インタビュー・テスト評価(A，A，B，B，C)との相関性を調べてみると， 名(13.7%)が2段階， 名(63.6%)が1段階評価が上がり， 名(22.7%)は評価が変わらなかった。

さらに，成績を上位群，中位群，下位群に分けた分析では，全ての群で成績が向上していた。中でも，中位群，下位群の成績の伸びが著しかった。自分の身近なことからについてのインタラクティブな言語活動を通して，リスニング力が向上したものと考えられる。

(2) 基本例文について

基本例文は，標準的なレベルで内容に興味を持てたと答える生徒が多かった。ペア・ワークやインタビュー・テストを通して，基本例文が身についたという達成感や自信が見られた。

学習した表現をできるだけ使う機会を持ち，身近な話題で言語活動することは，実践的なコミュニケーション能力育成の有効な手段であると考ええる。

(3) ペア・ワークについて

生徒は，生き生きと授業に参加し，様々な言語活動に積極的に取り組んだ。授業が楽しくなるとさらに積極的に参加でき，基本例文や単語が身についていくという好循環がみられた。

身近な話題をペアで話すことが生徒の相互理解を促し，コミュニケーションがよりスムーズになる様子が観察できた。アンケートでも「一人で学習するよりもペア・ワークでの学習の方が楽しい」という答えが多かった。

ペアで会話文を作る作業でも相互の協力やALTへの問いかけが，コミュニケーションを積極的に行おうとする姿勢につながるとともに，間違えることを恐れる消極さを取り除いていくことにつながっていた。

また，生徒はALTを身近に感じ，即興的な会話や習ったばかりの表現を使うことを通して，学んでいることの有用感や学習の達成感を味わうことができたようである。

(4) プレゼンテーションについて

受け手を意識して伝達しようとする姿勢に，明らかな進歩が見られた。始めに自分たちに注意を向けさせ，できるだけ伝える内容のあることを話し，最後に感謝の言葉を伝えるという流れができた。アイコンタクト，話す速度や声の大きさも，工夫する姿勢が見られた。

A L Tの前で、英語でプレゼンテーションをして評価を受けるというライブ感は、生徒にとって今まで経験したことのないものであった。英語を勉強する上での大変な刺激になり、コミュニケーションしようとする意欲は、時間の経過とともに目に見えて高まった。生徒は、英語が単なる学習の対象ではなく、生きた言葉であり、コミュニケーションを行うための有用な手段であることを実感することができた。

自己評価・他者評価は生徒相互の適度な刺激となっていた。また、自分を客観的に評価することにより、これからの自主的な学習の動機を高めることができた。

(5) インタビュー・テストについて

インタビュー・テストに対して生徒には当初かなりの戸惑いがあった。しかし、回を重ねるごとに、おどおどした態度や「わたしはしゃべれない」という拒否的な態度は少なくなった。A L Tと積極的に話す態度が身につく、英語を話すことが当たり前の感覚になり、会話などで能動的に使える語彙の量が増えた。また、A L Tには、生徒の Yes, No だけの答えは必ず言い直すように指導してもらったので、質問の最初の語(Is/Are/Have/Do/Did～)を注意深く聞くことを学んだ。

生徒に、スピーキング力がついた、と感じさせるためには、実際に1対1で話す場面を多くしてあげることが有効だと感じる。身の回りのことをすぐに英語にする経験を多くすることが、話す自信につながっていくのではないと思われる。

基本例文をインタビュー・テストの中に使ったことにより、自然に学習内容の復習をすることができた。

コミュニケーション方略は、最初は、ジェスチャー以外なかなか使うのが難しかった。しかし、ジェスチャー以外にも、“Pardon?”とか“by the way” “What does it mean?”などを意識して使えるようになってきたのはかなりの進歩であった。

8 おわりに

研究期間の中で、いろいろ悩む場面もあったが、何よりも良かったことは、生徒達とともに授業を作っていく、ということを経験できたことである。生徒の生き生きとした活動や、やる気のある表情を見ることが、私にとっての大きな励みとなった。しかし、「英語表現力の向上」は、生徒だけでなく、教員にとっても終わりのない大きな課題であるので、今後も継続的な研究が必要であると思う。

この研究において、平成18年度につきましては、県教育委員会指導主事の 先生、教科指導員の 先生、平成19年度につきましては、県教育委員会指導主事の渡 先生、教科指導員の 先生、そして2年間を通しましては、教科指導員の 先生にご指導いただきましたことに、心より感謝申し上げます。

参考文献

今井裕之・吉田達弘編著 兵庫教育大学 HOPE 開発プロジェクト著

「中高生のための英語スピーキングテスト」, 教育出版, 2007

白畑智彦他, 「英語教育用語辞典」, 大修館書店, 1999

竹蓋幸生他, 「英語 CALL 教材の高度化の研究, 特定領域研究(A)高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」, 2001

田中武夫・田中知聡著, 「『自己表現活動』を取り入れた英語授業」, 大修館書店, 2006

田中正道編, 「英語の使用場面と働きを重視した言語活動」, 教育出版, 2000

田中正道監修, 「これからの英語学力評価のあり方」, 教育出版, 2005

ドン・バーン著 松畑一潤監訳, 「教室でのインターアクションのための指導技術」, 桐原書店, 1996

和田 稔著, 「日本における英語教育の研究」, 桐原書店, 1997